

## 研究論文

# 日本人国外スポーツツーリストのサブリメンタル観光行動に関する阻害要因：

## アジアパシフィックマスターズゲームズ 2018 ペナン大会の日本人参加者の事例研究

### Constraints to supplemental tourism activities among Japanese outbound sport tourists: A case study of Japanese participants in the Asia Pacific Masters Games 2018 Penang

児嶋 恵伍<sup>1)</sup>、伊藤 央二<sup>2)</sup>、吉村 実佳<sup>3)</sup>、藤森 美月<sup>4)</sup>、坂本 直斗<sup>5)</sup>

Keigo Kojima, Eiji Ito, Mika Yoshimura, Mizuki Fujimori, Naoto Sakamoto

1) 和歌山県庁

2) 和歌山大学観光学部准教授

3) 株式会社エイチーム

4) イオンモール株式会社

5) 和歌山県新宮市役所

キーワード：国外マスターズ大会、大会運営、阻害要因、サブリメンタル観光行動、スポーツツーリズム

Key Words : international masters games, event management, constraints, supplemental tourism activities, sport tourism

#### Abstract :

Supplemental tourism activities will be key in increasing sport event participants' sense of satisfaction as well as economic impact. Therefore, the purpose of this study was to examine constraints to supplemental tourism activities among Japanese outbound sport tourists. A semi-structured interview was conducted with 23 Japanese participants at the Asia Pacific Masters Games 2018 Penang. The interview results identified 73.9% (n = 17) of the participants did not engage in supplemental tourism activities by experiencing masters-games-specific constraints, particularly event management. Poor event management (e.g., uncertain game schedules) resulted in a lack of time for their supplemental tourism activities. Our findings indicated that improving event management (e.g., notifying participants of game schedules in advance, keeping the schedules on time) is necessary for the World Masters Games 2021 Kansai to promote participants' supplemental tourism activities. Furthermore, research on supplemental tourism activities across various sport events is needed for the development of sport tourism.

#### I. 緒言

2018年の日本人出国者数は前年比6.0%増の1,895万人となっている(日本政府観光局, 2019)。日本人の海外旅行の目的として、リゾート地での滞在や世界遺産・名所への観光などが挙げられるが(日本旅行業協会, 2008)、ニューツーリズムの1つとしてスポーツツーリズムが注目を浴びている(観光庁, 2018)。国内では2019年以降を「ゴールデン・スポーツイヤー」と称し(間野, 2015)、ラグビーW杯2019日本大会、東京オリンピック・パラリンピック競技大会2020、ワールドマスターズゲームズ(以下「WMG」と称す)2021関西の連続した3つの世界規模のスポーツイベントが開催予定であり、その機運は高まっていると言える。例えば、毎年ハワイ

で開催される参加イベント型のホノルルマラソンでは、2017年の参加者数26,317人のうち、半数近くの11,727人が日本人参加者であり、国外のイベントにも関わらず多くの日本人が参加している(JAL HONOLULU MARATHON, 2018)。近年、国内外で注目されている参加型スポーツイベントとして、概ね30歳以上であれば参加できるマスターズゲームズが挙げられる。マスターズゲームズは開催規模・競技種目数は異なるが、これまで国内外で数多く開催されており、2018年に開催された第1回目となるアジアパシフィックマスターズゲームズ(以下「APMG」と称す)2018ペナン大会では、233名の日本人が参加している(兵庫県教育委員会, 2018)。また、2年後に控えているWMG2021関西では、国内30,000人、国外

20,000 人の参加者を予定しており、スポーツの更なる振興と共に、開催都市・県（州）・国への大きな経済効果が期待されている（彦次・伊藤, 2018）。

このような経済効果には当然、大会参加に付随する観光も含まれている。Nogawa, Yamaguchi, and Hagi (1996) は、スポーツツーリストの大会参加に付随する観光行動 (touristic activities) と観光消費の傾向から、彼らはアクティブなツーリストになる可能性を内包していることを指摘している。そして、工藤・野川 (2004) は主目的としてのスポーツイベント参加を補足するこのような観光をサプリメント観光と呼び、その特徴について以下のように述べている。

生涯スポーツイベントに代表されるようにイベント参加者の大衆化が進んだ昨今では、スポーツイベント参加後に、開催地の特産品を土産として購入し、名所・旧跡を訪れ、郷土料理を味わい、地酒に舌鼓を打ち、温泉で体を休める等の活動に魅力を感じる参加者も相当数いる。むしろ、そのような活動を引き出すような働きかけが、開催地への再来のきっかけとなり、旅行者獲得につながると考えられる (p. 16)

国外のイベント学においても、Getz and Page (2016) がイベント参加に付随する観光による経済効果の重要性を以下の通り主張している。

The aim of 'leveraging' strategies is to generate greater economic benefits from events, over a longer period of time, and to spread them more widely. This can be accomplished through encouraging tourism pre- and post-event, packaging event visits with wider travel itineraries, and joint marketing among attractions and destinations. (p. 365)

Nogawa et al. (1996)、工藤・野川 (2004)、Getz and Page (2016) のこれらの主張を基に、本研究では大会参加に付随する観光行動を「サプリメント観光行動 (supplemental tourism activities)」と呼称することにした。実際、2017 年にオークランドで開催された WMG において、国内からの訪問者は平均 6.4 日（日帰りも含む）を過ごし、海外からの訪問者は平均 9.8 泊と報告されている（自治体国際化協会, 2018）。つまり、このようなスポーツツーリストは工藤・野川 (2004) が指摘する通り、主目的である大会参加だけでなく、大会開催地での観光といった副次的な観光行動にも時間と費用を費やしていると考えられる。また、このような過去の実績から、WMG2021 関西組織委員会は SNS 等を用いて、開催地域である関西エリアの 2 府 7 県の観光情報を発信するなど、サプリメント観光行動の積極的なプロモーション活動を展開している（WMG2021 関西組織委員会, 2018）。サプリメント観光行動の充実はイベント参加者の満足度につながり、再訪者の獲得に貢献することが予想される。

大会に参加するのみだけでなく、サプリメント観光行動を

十分に楽しむためには一定期間の現地での滞在が必要となる。このためにはまとまった休暇が必要になるが、日本には長期休暇を取る習慣が欧米に比べ浸透していないことが指摘されている（中溝, 2018）。日本政府は 2016 年までに 1 人あたりの年間の宿泊観光旅行日数を 2.5 泊とする目標を掲げたが、2017 年の数値は 2.3 泊にとどまっており、依然として達成する見込みが立っていないことが明らかになっている（観光庁, 2018; 中村, 2015）。このように宿泊日数が伸びない原因の 1 つとして、現代日本の長期休暇の習慣の不足が考えられ、より長期の日数を要する海外旅行の促進において大きな課題となりうる。宿泊を伴い 24 時間以上現地で滞在することがスポーツツーリストの主な特徴であることを考慮すると（Nogawa, Yamaguchi, & Hagi, 1996）、このような時間的問題はスポーツツーリズムの参与を妨げる要因（問題）と言われる阻害要因の 1 つとして考えられる（彦次・伊藤, 2018; Ito & Hikoji, 2018）。特に WMG のような会期の長い大会への参加に当たっては、阻害要因は看過できない要因であることを彦次・伊藤 (2018) は指摘している。実際に、国外マスターズ大会の日本人参加者は、WMG2021 関西においても参加者の筆頭であり、彼らが大会参加時にサプリメント観光行動をする際にどのような問題を経験するのか調査することは、WMG2021 関西の日本人参加者にサプリメント観光行動を促すために重要な基礎資料をもたらすと考えられる。さらに、WMG など国外のマスターズ大会参加者の大会参加に関わる阻害要因の研究は近年注目を浴び始めたが（彦次・伊藤, 2018; Ito & Hikoji, 2018）、マスターズ大会参加者のサプリメント観光行動に関わる阻害要因研究は等閑視されている傾向にある。以上のことから、国外マスターズ大会日本人参加者のサプリメント観光行動に関わる阻害要因について明らかにすることを本研究の目的とした。

## II. 先行研究の検討

観光戦略において、休暇目的以外で訪問した旅行者にいかにつ随的な観光消費をしてもらうかは重要である。先述したとおり、スポーツイベントだけではなくイベント全般においても、イベント前後の観光の促進、長めの旅程を伴うパッケージツアーの提供、複数の観光アトラクション・観光地の共同マーケティングが、イベントの経済効果を高めることを Getz and Page (2016) が報告している。特に国内では、スポーツツーリズムの文脈において、沖縄県がサッカーキャンプやサイクリングイベントなどの事業を積極的に展開すると共に、エコツーリズム等の他のツーリズムのあり方を確立するためのプロモーション活動を実施し、より付加価値の高い旅行メニューを推進するため、MICE 誘致を拡大するなど、新たな市場の開拓をめざしていることを杉谷 (2012) が報告している。しかし、スポーツツーリズムに関するサプリメント観光行動研究は国内だけではなく国外においても非常に限られている。本トピックの唯一無二

の研究とみなされる工藤・野川（2004）は、イベント参加に旅行を伴う経験を多く持つ中高年参加者が多いという理由から日本スポーツマスターズ 2002 ボウリング大会の参加者を対象に質問紙調査を実施している。彼らの調査結果から、参加者の多くがイベント開催地の観光プログラムに関心があり、実際に 64.8% の参加者がサプリメンタル観光行動を行っていたことが明らかになった。しかしながら、イベント参加が主目的のためサプリメンタル観光行動に費やす時間がないといった阻害要因が報告されていた。

本研究のメインテーマである阻害要因は Constraints と呼ばれ、国外の余暇・レジャー分野で 1980 年代から研究が行われてきた (Jackson, 2000)。具体的には、阻害要因は余暇・レジャー活動の参与ならびにその楽しみを妨げるものや個人の余暇・レジャー活動の選好の構築を制限する要因と Jackson (2000) によって定義されている。Crawford and Godbey (1987) によると、阻害要因は個人的（性格や不安といった個人の心理的状态に基づくもの）、対人的（他者との対人関係から生じるもの）、構造的（金銭や時間といった外的状況によって生じるもの）の 3 要因に分類される。これらの 3 要因を基に、観光行動と阻害要因の関連性についても国内外で研究が行われている。国内において、中村（2015）は 30 歳から 69 歳までの日本人を対象に、海外旅行への関心と意向に影響を与える要因について精査している。過去の海外旅行経験回数、海外旅行への自己効力感、海外旅行への阻害要因、海外旅行への動機づけ、海外旅行への関心、海外旅行の実施意向の 6 つの変数間の因果関係について仮説を設定し、検証している。その結果、過去の経験と自己効力感が、阻害要因に対してネガティブな影響を与え、阻害要因が低減することで、海外旅行の関心が向上することが明らかにされている。さらに、関心の向上は動機づけや意向の向上につながることも明らかにしていることから、阻害要因の解消は海外旅行への促進につながるであろう。国外においては、Huang and Hsu (2009) が北京在住で香港来訪経験者 501 名に対し、電話インタビューで香港への再訪意図を尋ねている。動機、過去の来訪経験、阻害要因が質問項目として用いられたが、対人的阻害要因および構造的阻害要因は、再訪意図に対して有意な関連性を示さなかったが、非興味阻害要因だけが再訪意図にネガティブな影響を与えることを明らかにしている。

スポーツツーリズムといった文脈においても阻害要因研究が国内外で報告されている。国内では、西尾・岡本・石盛（2013）がスポーツツーリストであるホノルルマラソンの参加者 218 名に対し、スポーツ参加動機、観光動機、阻害（制約）要因の各要因がイベント満足度と再参加意図にどのような影響を与えるかを検証している。その結果、阻害要因である観光情報が満足度に有意なネガティブの影響を与え、ハワイへの魅力、大会以外のレジャー活動の情報不足が参加者の不満に関連していると報告している。このことからスポーツイベントにおい

て、大会自体の魅力も重要であるが、同時にそれに付随するサプリメンタル観光行動も重要であることがうかがえる。本研究と同様に日本人マスターズ参加者の阻害要因に焦点を当てた Ito and Hikoji (2018) は、国内大会参加と国外大会参加では経験する阻害要因が異なることを報告している。国内大会参加では、時間的阻害要因（仕事等）、身体的阻害要因（体調等）、マスターズ大会特有の阻害要因（大会の情報不足等）の影響を明らかにしている。国外大会参加にはこれらに加え、旅行的阻害要因（言語の壁等）と金銭的阻害要因（旅費等）が大会参加を妨げる要因になることを Ito and Hikoji (2018) は明らかにしている。同様に、彦次・伊藤（2018）は WMG 2017 オークランド大会の日本人参加者を対象に半構造化インタビュー調査を実施し、国外マスターズ大会参加の際に仕事や家族に関わる責任が時間的阻害要因として確認されたことを報告している。国外では、Funk, Alexandris, and Ping (2009) が 2008 年に開催された北京オリンピック観戦に関する行動意図と動機づけおよび阻害要因の関連性を検証している。オーストラリアにおいて、47 名に対し半構造化インタビューを、アメリカで 235 名に対し質問紙調査を実施した。その結果、大会への興味や文化的経験などを含む動機づけは行動意図にポジティブな関連性を示したが、構造的、対人的および個人内の 3 つを含む阻害要因がネガティブな関連性を示していた。

このように先行研究では一般的な観光行動だけではなくスポーツイベントを含むさまざまな文脈で、阻害要因が観光行動に対してネガティブな関連性を示すことを明らかにしている。しかしながら、日本人マスターズ大会参加の際の阻害要因は Ito and Hikoji (2018) や彦次・伊藤（2018）が明らかにしているものの、スポーツイベント大会参加に付随するサプリメンタル観光行動の阻害要因に着目した研究は行われていないのが現状である。また、2021 年にメガイイベントとして、アジア初となる WMG2021 関西を控えている。マスターズ大会参加者の多くは過去の大会参加経験者であり、国外のマスターズ大会日本人参加者は、WMG2021 関西の筆頭参加者であると考えられる。先行事例として彼らの大会参加に付随するサプリメンタル観光行動の阻害要因を明らかにすることは、WMG2021 関西の開催地となる 2 府 7 県での観光戦略においても有益な情報支援となると考えられる（彦次・伊藤, 2018; Ito & Hikoji, 2018）。

### Ⅲ. 調査方法

調査対象者を 2018 年 9 月にマレーシアのパナンで開催された第 1 回 APMG2018 パナン大会の日本人参加者とした。工藤・野川（2004）のサプリメンタル観光行動研究と同様にマスターズ大会参加者を対象としたが、本研究ではこれまでに調査されていない国外大会の日本人参加者に焦点を当てた。また、彦次・伊藤（2018）の WMG 2017 オークランド大会日本人参加者の大会参加の阻害要因に焦点をあてた研究と同様に、



本研究でも大まかな質問項目を事前に作成したうえで、それぞれの回答者の回答に合わせさらに詳細な内容の聞き取りを行う半構造化インタビューを用いた。調査期間は2018年9月8日から9月13日までの6日間であった。なお調査では、2つの方法で調査参加者に対してアプローチを試みた。1つ目の方法として、現地滞在期間中で訪問した複数の競技会場にて、日本人参加者に声を掛け、調査参加意思を確認後、試合後および試合の間にインタビューを実施した。2つ目の方法として、大会開催前にWMG2021 関西組織委員会と協議し、現地のホテルにて当組織委員会が開催するAPMG日本人参加者を

項 目	質 問 内 容
観光の有無	Q1: 今回の大会参加に加えて、観光に行きますか(行きましたか)?
観光について (Q1に「はい」と答えた場合)	Q2-1: いつ行きますか(行きましたか)?
	Q2-2: どちらへ行きますか(行きましたか)?
	Q2-3: どなたと行きますか(行きましたか)?
	Q2-4: どのようにして行きますか(行きましたか)?
観光面での不便さ	Q3: どのような点に不便さを感じましたか?
観光面の問題点	Q4: 観光面で困ったことはありましたか?
ペナン大会	Q5: 大会に関して何か改善点はありますか?(運営面など)
WMG2021 関西	Q6: WMG2021 関西に対してご要望等がありますか?

表1 観光に行った場合の質問項目

項 目	質 問 内 容
観光の有無	Q1: 今回の大会参加に加えて、観光に行きますか(行きましたか)?
観光に行かなかった理由 (Q1に「いいえ」と答えた場合)	Q2: どうして観光に行かなかったのですか? (日程の問題、行先の問題、同伴者の問題、移動手段の問題など)
観光の希望	Q3: Q2の問題点が解消された場合は、観光に行きたいですか?
観光面の問題点	Q4: 観光をする場合、何か困ることはありますか?
ペナン大会	Q5: 大会に関して何か改善点はありますか?(運営面など)
WMG2021 関西	Q6: WMG2021 関西に対してご要望等がありますか?

表2 観光に行かなかった場合の質問項目

対象としたアスリート交流会を調査場所として選定した。交流会は9月7日、9日、11日の合計3日間行われ、そのうちの2日間で、会場内にて調査参加意思を示した参加者に交流会中および交流会後にインタビューを実施した。なお、インタビューの平均時間は約15分であった。

調査項目については、西尾ら(2013)の調査に用いた観光動機および阻害要因の質問項目を参考に作成した。彼らは、ハワイで開催されたマラソンイベントの日本人参加者を対象としており、この点は海外のマスターズ大会日本人参加者を対象とした本研究と一致している。また、彼らの研究では阻害要因として観光面が挙げられていたことから、彼らの質問項目を参考することにした。インタビュー調査では、まず、調査参加者に今大会参加に伴う観光の有無について尋ねた。「観光」について、開催地が世界遺産などの名所・旧跡を数多く持つリゾート地のペナン島であったことから、名所・旧跡への訪問やツアーへの参加などある程度の時間を費やす観光を主に想定した。「はい」と答えた参加者には、観光に関する質問として、日時・行先・同伴者・移動手段・費用および観光面で不便に感じたことについて尋ねた。一方、「いいえ」と答えた参加者には、観光に行かなかったもしくは行けなかった理由、そして、それらの問題が解消された場合は観光を行うかを尋ねた。また、最後に共通の質問項目として観光面で困ったこと、APMG ペナン大会での問題点を含めたWMG2021 関西大会への要望について尋ねた(表1・表2)。分析方法に関しては、インタビューを行った筆頭著者および共同筆者が、インタビュー内容を書き起こし、挙げられた問題点をIto and Hikoji (2018)が報告している阻害要因(時間的、身体的、マスターズ大会特有的、金銭的、旅行的要因)を参考にしながら内容分析を行った。

#### IV. 結果と考察

3つの競技会場(テニス、卓球、バドミントン)とアスリート交流会会場にて、計23名へのインタビュー調査を実施した。競技別の回答者内訳は、テニスが7名(男性:1名、女性:6名)、バドミントンが6名(男性:1名、女性:5名)、卓球が5名(男性:1名、女性:4名)、ビーチバレーが5名(男性:4名、女性:1名)であった。また、大会参加に伴う観光の有無について、23名のうち観光に行かなかったと回答した参加者は17名であり、回答者全体の73.9%を占める結果となった。これは国内のマスターズ大会を対象とした工藤・野川(2004)の報告とは真逆の結果となった。国内・国外といった違いで、サブリメンタル観光行動の実施状況が異なることがうかがえる。

テニスの会場となっているPenang Sports Clubでは、男性1名と女性6名に調査を実施することができた。回答者全員、観光に行くことはなく、滞在中は基本的に競技会場と宿泊施設の間の往復であった。彼らは観光に行けなかった理由に、主に大会運営の問題を挙げていた。例えば、「集合時間お

よび試合時間が前日もしくは当日にならないとわからない」(男性)、「スケジュール等の事前情報が少なかった」(女性)といった声が聞けた。テニスでは、1人につき、1日1試合しか行われなかったため、前夜にホームページ上で更新されるスケジュールの確認が必須であったが、実際は前日でも情報が掲載されないなどのトラブルに加え、無料 Wi-Fi の設備が充実しておらず、当日朝早くから試合会場に向かい試合スケジュールを確認する必要があった。また各コートで試合時間は異なり、場合によっては待ち時間と試合時間で1日のほとんどを試合会場で過ごす結果になった。このような不十分な運営形態により、参加者は大会参加以外のスケジュールを組むことができず、観光に費やす時間的余裕がなかったと考えられる。この大会運営の不手際は Ito and Hikoji (2018) が指摘するマスターズ大会特有の阻害要因であり、Ito, Kono, and Walker (in press) が指摘するように研究対象となる文脈に合わせた特有の阻害要因を明らかにする必要があることが示唆された。このマスターズ大会特有の阻害要因から派生した時間不足もテニス参加者の観光への時間的阻害要因として考えられる (Ito & Hikoji, 2018)。

バドミントンの会場となっている Penang Badminton Association では、男性1名と女性5名にインタビューを行った。観光について、回答者6名のうち4名が大会前に観光したと回答した。しかし、これは台風の影響による飛行機の変更のため、経由地であったシンガポールでの滞在時間が予定より長くなり、観光する時間的余裕ができたためであった。これは、トランジット客をサプリメンタル観光行動に取り込むためにシンガポールのチャンギ空港が行っているプロモーションの成果の表れであったかもしれない (Changi Airport Singapore, n.d.)。一方、彼らは、「大会のスケジュールがタイトで、夜遅くまで試合が続いた」(女性)ことや「バスの時間に関する事前情報が無く、試合会場で確認せざるを得なかった」(女性)ことなど、テニス参加者と同様に大会運営に関する阻害要因を挙げていた。試合スケジュールによる試合会場での拘束や公共交通機関の情報提供不足(試合会場までの交通アクセス)により、観光ができなかったことから、バドミントン参加者間でもマスターズ大会特有の阻害要因が観光行動に対し障壁となっていると推察できる。

卓球会場である Penang Table Tennis Training Centre では、男性1名、女性4名にインタビューを行った。観光について、2名が大会前および大会期間中にマレーシアのペナンで観光したと回答した。この2名に関しては、旅行会社を通じて大会に参加しており、ツアーオプションの一環として観光を行っていた。旅行会社という外的資源を通じて、阻害要因を折衝していることが明らかになった。しかしながら、卓球参加者も「卓球台の数も少なく、大会進行も元々のスケジュールに合わせて、台の空き状況に応じた柔軟な試合進行を行わず、終了時間が無意味に遅くなっている」問題点(男性)、「スケジュール

等の事前情報がなく、会場でしか確認ができない」問題点(女性)など大会運営に関する問題について言及していた。彼らの意見から、状況に応じた柔軟な試合進行を行っていれば、全体のスケジュールも早めに終了し、残りの時間を観光に活用できたと考えられる。また、テニス参加者と同様に、試合当日の具体的なタイムスケジュールを事前に確認する術がなかったことも観光行動に関してネガティブな結果を生んだ原因となり、マスターズ大会特有の阻害要因が重要であることが示唆された。

最後に Bayview Hotel Georgetown Penang で開催された日本人参加者が集うアスリート交流会では、男性4名、女性1名のビーチバレーボール参加者にインタビューを実施することができた。調査結果から、回答者全員が観光をしていなかったことが明らかになった。彼らも大会運営について言及していたが、「日本の大会運営がスムーズで差を感じた」(男性)や「ペナンの人はゆったりしている印象で、それが大会運営にも表れている」(女性)など文化的相違により生じた問題点を指摘していた。大会運営に関することであるため、これらもマスターズ大会特有の阻害要因に該当するが、彦次・伊藤(2018)がWMGオークランド大会の日本人参加者の大会参加に関する阻害要因で明らかにした文化的阻害要因(日本人は有休を活用することをためらう)に類似していると考えられる。加えて、国外で開催されるスポーツイベントであるため、Ito and Hikoji (2018)が旅行的阻害要因として報告していた言語の壁も文化的阻害要因に関連してくると思われる。

本調査では、4競技の参加者に対してインタビューを行った結果、約74%の調査参加者が観光していないと回答した。この結果を受けて、現地では、大会受付付近にパンフレット配布や現地ツアー転売などを行う観光ブースも設置されていたが、日本人参加者は積極的に利用していなかったことがうかがえる。また、Nogawa et al. (1996)の報告と同様に、調査参加者のほとんどが観光への無関心などが原因で自主的に行かなかったのではなく、外的要因により行けなかったと答えていた。外的要因について、各競技で事情が若干異なるが、いずれの競技においても共通して大会運営に関する問題点が挙げられた。これらは、大局的視点からみると Crawford et al. (1991)が挙げている3つの阻害要因のうち、時間や気候などの外的状況によって生じる構造的阻害要因であると言えるが、局所的視点からみると Ito and Hikoji (2018)が報告するマスターズ大会特有の阻害要因であると言える。つまり、試合当日のタイムスケジュール等を把握できないことや長時間の試合会場での拘束により、自由時間を自身で捻出することができず、ある程度の時間が必要となるツアーへの参加や世界遺産などの名所を訪れるといった観光を計画できないという悪循環が考えられる。加えて、一部の参加者が大会参加にあたり、現地での十分な滞在期間を確保できなかった点も関係していると考えられる。テニス会場でインタビューをした女性



6名は、「5日間の滞在中ほぼ連日、試合が組み込まれ、試合最終日まで滞在できない」と話していた。滞在期間について、マスターズ大会参加者は大会参加にあたり仕事や家族が関わる時間的阻害要因が大きく障壁となっていることが (Ito & Hikoji, 2018)、滞在期間の短期化につながったと考えられる。また先述したように、日本文化には仕事を休みにくいという特有な要因が根付いており (伊藤・山口・岡安・北村・Walker, 2016; 彦次・伊藤, 2018)、このことが日本人の時間的阻害要因をより大きな障壁と感じさせていると考えられる。本調査の対象者は、APMG2018 ペナン大会参加中の日本人であるため、すでに参加前の阻害要因を完全にもしくは部分的に折衝していたと考えられる。しかし、大会運営など自身ではコントロールできないマスターズ大会特有の阻害要因により、現地での「時間不足」が生じ、観光をおこなえない結果となっていた。海外旅行の阻害要因の知覚の程度を学生と社会人で比較した中村 (2013) は、構造的阻害要因として「金銭不足」と「時間不足」を挙げているが、「時間不足」を知覚するのは学生よりも社会人であると報告している。一般的にマスターズ大会参加者は30歳以上であることから、阻害要因として「時間不足」を強く知覚する傾向にあることがうかがえる。さらに、天野 (2009) は新潟県佐渡市で開催された「スポニチ佐渡ロングライド 210」の参加者 3,506 名の観光行動を調査し、多くの参加者が特段の観光行動を取らずに帰途についていることを明らかにしている。理由として悪天候なども挙げられたが、その多くは日程に余裕がないなど「時間不足」を挙げていた。これらの報告は、大会運営の不便などのマスターズ大会特有の阻害要因による「時間不足」が観光行動を妨げていたという本研究の結果と一致している。加えて中村 (2015) は、阻害要因の低減は海外旅行への関心に繋がり、さらに、関心は動機づけや意向へと繋がることで海外旅行および観光が促進されることを明らかにしている。このことからスポーツイベント参加に伴う現地での観光行動を生み出すためには、多くの参加者に見られたマスターズ大会特有の阻害要因が生み出す「時間不足」をいかに解決するかが重要であると考えられる。

しかしながら、阻害要因が除去されれば全ての参加者が必ずしも観光をするわけではない。中村 (2015) は阻害要因を解決しても、観光しない人はしないという見解を述べている。観光に対してそもそも興味や関心を示さない人は、大会参加以外の時間を確保できたとしても、その時間を観光に充てることはないと考えられる。また、工藤・國本・三島 (1998) によると、イベント参加型のスポーツツーリストは「観光資源を包括的にスポーツイベントの魅力と捉えて、イベント参加に観光を伴うツーリスト」と「スポーツイベントに参加することを重視し観光を伴わないツーリスト」の2種類に分類されると述べている。後者が観光を伴わない理由として、イベント参加へのコミットメントが強く、イベント参加を主要目的としていることを挙げている。Trauer, Ryan, and Lockyer (2010) はマスター

ズ大会参加者を競技志向によって「イベント愛好家 (games enthusiast)」と「真剣な競技者 (serious competitor)」に分類しているが、「真剣な競技者」は大会参加に重きを置き、時間的余裕があったとしても、サブリメンタル観光行動に時間をあまり費やさないことが推察される。本研究では、大会参加へのコミットメントの程度や競技志向を尋ねていないが、対象者は国外マスターズ大会参加者であることから、競技志向は高いと考えられる。WMG2021 関西に向けて、マスターズ大会参加者の観光行動をより活発にするには、阻害要因の1つである「時間不足」の解消のみだけでなく、観光の意思を伴わない真剣な大会参加者を観光へと駆り立てるきっかけづくりも今後必要であると考えられる。また、きっかけを作ることで、彼らが今後リピーターとして、観光目的で開催地を再訪することが期待される。佐藤・岡本 (2011) は、観光地にとって、リピーターは経済的収入の安定性を維持する上でも重要なターゲットであることを報告していることから、大会時に各開催府県が観光地の魅力を伝えられるかが重要となってくる。

## V. 結論

本研究の目的は、国外マスターズ大会日本人参加者のサブリメンタル観光行動に関わる阻害要因について明らかにすることであった。APMG2018 ペナン大会の日本人参加者 23 名への半構造化インタビューの結果から、大会運営等のマスターズ大会特有の阻害要因およびそれが原因の時間的阻害要因が大会参加に伴うサブリメンタル観光行動の重要な問題となっていることが明らかになった。Ito and Hikoji (2018) および彦次・伊藤 (2018) は WMG など国外のマスターズ大会参加者を調査対象とした研究が少なく、スポーツツーリストである大会参加者にとって阻害要因は看過できない要因であり、これらを明らかにすることは必要不可欠であると報告している。本研究は研究例の少ない日本人の国外マスターズ大会参加者に焦点を当て、これまで等閑視されてきた彼らのサブリメンタル観光行動に関わる阻害要因について明らかにしたという、学術的意義があると考えられる。

本研究の結果から、参加者の大会参加以外の時間不足の大きな原因に大会運営の問題について多くの参加者から言及された。WMG2021 関西に向けて、過去の大会運営における問題点を把握し、改善することが必要である。具体的には、まずタイムスケジュールに関する情報が事前に正確に把握できない点が挙げられた。試合前日までにホームページ等で確認できることが通常であるが、APMG2018 ペナン大会では当日の試合会場でしか確認できなかった事例が数多く報告されている。WMG2021 関西では、大会参加者が観光等の予定を事前に計画できるよう各競技のタイムスケジュールの情報提供を正確に素早く行うことが必要である。実際、WMG2021 関西では「Team Do Sports Portal」という会員登録制のアプリケーションを用いて、競技や大会参加に関する情報提供を

行っている。このアプリケーションを参加者全員に登録してもらい、タイムスケジュールの配信機能を組み込むことで、参加者は容易にそして確実にタイムスケジュールを把握できると考えられる。大多数の参加者が問題なく利用できるようアプリケーションの更なる性能向上とインターネットアクセスの利便性を向上させるための公衆無線 LAN 環境の整備が求められる。また、APMG2018 ペナン大会では深夜まで試合が開催されるなど、スケジュールや試合進行にも問題が見られた。競技性、参加者数、会場設備により各競技で状況は異なり改善が難しい場合もあるが、大会参加のみで滞在期間が終わってしまうことがないようゆとりをもったスケジュール計画ならびに試合当日の状況に応じた柔軟な試合進行が求められるだろう。特に WMG2021 関西は関西圏内の複数の府県で開催される。WMG2021 関西では複数競技に参加することができるが、参加希望競技が複数府県に跨る場合、移動等にも時間を費やすことになり時間不足が観光行動だけではなく、イベント参加自体へのより強い阻害要因となりうる。WMG2021 関西に向けてこのように運営面に関する提言をできたことは、本研究の実践的意義と言えるだろう。

本研究における主要な限界は、4 競技の参加者にしかインタビューを実施できなかった点が挙げられる。マスターズ大会特有の阻害要因として指摘された大会運営は競技種目によって異なることが予測される。また、調査参加者の年齢や居住地といった個人属性を把握できなかったことは本研究の大きな課題である。加えて、先述したように、調査参加者の大会参加へのコミットメントや競技志向といった個人的属性の情報不足も本研究の重要な研究の限界であると言える。加えて、本研究では阻害要因のみに焦点を当て、観光行動の阻害要因の影響を回避もしくは軽減するための手段である「阻害要因折衝 (constraint negotiation)」について触れなかったことも重要な課題であると言える。どのようにして阻害要因を乗り越え、解決していくかを明らかにすることは、2 府 7 県の広域で開催され、国内外から 50,000 人が参加予定の WMG2021 関西におけるサブプリメンタル観光行動のプロモーション活動に有益な情報となるだろう。最後に、WMG のような参加型スポーツイベントだけではなく、ラグビー W 杯 2019 日本大会や東京オリンピック・パラリンピック競技大会 2020 のような観戦型スポーツイベントのスポーツツーリストを対象としたサブプリメンタル観光行動研究がスポーツツーリズム分野の発展に今後求められるだろう。

## 引用文献

- 天野宏司 (2009) スポーツイベントの創出と観光振興に関する研究: スポニチ佐渡ロングライド 210 を事例に. 文化情報学, 16 (2), 35-52.  
 Changi Airport Singapore. (n.d.). Transit. Retrieved from <http://www.changiairport.com/en/airport-guide/transit.html>  
 Crawford, D. W., Jackson, E. L., & Godbey, G. (1991) A hierarchical

- model of leisure constraints, *Leisure Sciences*, 13 (4), 309-320.  
 Funk, D. C., Alexandris, K., & Ping, Y. (2009) To go or stay home and watch: Exploring the balance between motives and perceived constraints for major events: A case study of the 2008 Beijing Olympic Games. *International Journal of Tourism Research*, 11, 41-53.  
 Getz, D., & Page, S. J. (2016). *Event studies: Theory, research and policy for planned events* (3<sup>rd</sup> ed.). Routledge  
 彦次佳・伊藤央二 (2018) 国外マスターズスポーツ大会参加者の阻害要因および阻害要因折衝: World Masters Games 2017 Auckland 参加者の事例報告. 生涯スポーツ学研究, 15 (2), 9-15.  
 Huang, S. & Hsu, C. H. C. (2009) Effects of travel motivation, past experience, perceived constraint, and attitude on revisit intention. *Journal of Travel Research*, 48 (1), 29-44.  
 兵庫県教育委員会事務局スポーツ振興国際広域スポーツ班 (2018) アジアパシフィックマスターズゲームズ (APMG) 2018 ペナン大会の概要. [https://web.pref.hyogo.lg.jp/governor/documents/g\\_kaiken180911\\_02.pdf](https://web.pref.hyogo.lg.jp/governor/documents/g_kaiken180911_02.pdf) (参照日 2019 年 3 月 2 日).  
 Ito, E., & Hikoji, K. (2018). Constraints and constraint negotiation when participating in domestic and international masters games. *International Journal of Sport and Health Science*, 16, 120-127.  
 Ito, E., Kono, S., & Walker, G. J. (in press). Development of cross-culturally informed leisure-time physical activity constraint and constraint negotiation typologies: The case of Japanese and Euro-Canadian adults. *Leisure Sciences*. Advance online publication. <https://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/01490400.2018.1446064>  
 伊藤央二・山口志郎・岡安功・北村薫・Walker G. J. (2016) 青年の野外レクリエーションの参加動機と阻害要因が野外レクリエーション参加に与える影響: 日本とカナダの文化的類似・相違点の比較検討. 体育学研究, 61, 11-27.  
 Jackson, E. L. (2000) Will research on leisure constraints still be relevant in the twenty-first century? *Journal of Leisure Research*, 32 (1), 62-68.  
 Jackson, E. L., Crawford, D. W., & Godbey, G. (1993) Negotiation of leisure constraints. *Leisure Sciences*, 15, 1-11.  
 JAL HONOLULU MARATHON (2018) <https://www.honolulumarathon.jp/2018/> (参照日 2019 年 3 月 2 日).  
 自治体国際化協会 (2018) 2017 年ワールドマスターズゲームズ・オークランド大会の運営及び成果. <http://www.clair.or.jp/j/forum/pub/docs/457.pdf> (参照日 2019 年 3 月 2 日).  
 観光庁 (2018) 平成 29 年観光の動向 <http://www.mlit.go.jp/common/001237301.pdf> (参照日 2019 年 5 月 2 日)  
 観光庁 (2018) スポーツツーリズム推進の方向性 <http://www.mlit.go.jp/common/000121396.pdf> (参照日 2019 年 3 月 2 日).  
 工藤康宏・國本明徳・三島和康 (1998) ウォーキングイベントにおけるスポーツ・ツーリストの観光行動と消費傾向に関する研究. 日本体育学会大会号, 49, 199.  
 工藤康宏・野川春夫 (2004) スポーツイベント開催に伴うサブプリメンタル観光に関する研究. 生涯スポーツ学研究, 2 (1), 15-21.  
 間野義之 (2015) 奇跡の 3 年 2019・2020・2021 ゴールデン・スポーツイヤーズが地方を変える. 徳間書店.  
 中溝一仁 (2018) 余暇としての「旅」の持つ意味: 高齢者の「旅行・観光」に関する質的調査から. 応用社会学研究, 60, 155-170.  
 中村哲 (2013) 海外旅行の阻害要因の実証分析: 日本の「若者の海外旅行離れ」を対象として. 玉川大学観光学部紀要, 1, 1-22.  
 中村哲 (2015) 日本人の海外旅行への関心と意向に影響を与える要因. 玉川大学観光学部紀要, 3, 35-55.  
 日本政府観光局 (2019) 平成 30 年訪日外客数・出国日本人数. [https://www.jnto.go.jp/jpn/news/press\\_releases/pdf/190116\\_monthly.pdf](https://www.jnto.go.jp/jpn/news/press_releases/pdf/190116_monthly.pdf) (参照日 2019 年 3 月 2 日).

- 日本旅行業協会 (2008) 「海外旅行に関する調査」調査報告書.  
[https://www.jata-net.or.jp/vwc/pdf/0809tm\\_data.pdf](https://www.jata-net.or.jp/vwc/pdf/0809tm_data.pdf) (最終閲覧日 2019 年 3 月 2 日).
- 西尾建・岡本純也・石盛真徳 (2013) 参加型海外スポーツイベントにおけるアウトバンド・ツーリストの研究: ホノルルマラソン参加者の動機と制約要因について. *スポーツ産業学研究*, 23 (1), 75-88.
- Nogawa, H., Yamaguchi, Y., & Hagi, Y. (1996). An empirical research study on Japanese sport tourism in sport-for-all events: Case studies of a single-night event and a multiple-night event. *Journal of Travel Research*, 35 (2), 46-54.
- 佐藤友里子・岡本直久 (2011) 国内旅行におけるリピーターの行動特性及び醸成要因に関する研究. *土木学会論文集*, 67 (5), 455-464.
- 杉谷正次 (2012) 沖縄観光におけるスポーツ・ツーリズムの現状と課題. *東邦学誌*, 41 (2), 47-64.
- Trauer, B., Ryan, C., & Lockyer, T. (2010) The south pacific masters' games – competitor involvement and games development: Implications for management and tourism. *Journal of Sport & Tourism*, 8 (4), 240-259.
- World Masters Games 2021 関西組織委員会 (2018) 観光情報.  
<https://www.wmg2021.jp/tourism/index.html> (参照日 2019 年 3 月 2 日).

## 謝辞

本調査は公益財団法人ワールドマスタースゲームズ 2021 関西組織委員会・スポーツコミッション関西の助成および JSPS 科研費 16K21172 の助成を受けたものです。また、調査実施に際して多大なご協力を賜った公益財団法人ワールドマスタースゲームズ 2021 関西組織委員会の川村様・山本様に感謝申し上げます。最後に、投稿論文の査読過程で有益なコメントを下された永井隼人先生（和歌山大学観光学部）に感謝の意を表します。

受理日 2019 年 5 月 24 日